



坂本 育子
婦人科部長

ど、全国から注目を集める存在となっている。
同院婦人科部長兼ゲノム検査科部長の坂本育子医師によると、婦人科では良

医療最前線 ロボットと未来

県立中央病院から

〈262〉

山梨県立中央病院に手術支援ロボット「ダヴィンチ」がやってきたのは2016年。同院婦人科はこのロボットを積極的に活用し、国内トップクラスの実績を誇っていて、他県からも多くの医師が見学を訪れるな

腫瘍、子宮体がんに加え、子宮が膣の入り口より外に出してしまう「子宮脱」の手術でダヴィンチを活用。組織をつかむ「鉗子」や電気メス、カメラが取り付けられているアームがあり、医師はモニターを見ながら操

作する。保険適用範囲が大幅に拡大した18年以降、同院婦人科は21年までに計509件、開腹を含めた腹式手術全体の割合は11・6%（21

年）に上昇。ほぼ半数を占めるまでになった。「全国で最上級」と呼べる手術件数を積み重ねることができた大きな要因の一つが効率化だ。迅速な手術後

術後の傷口の痛みが軽減していることも分かった。一方、ロボットの歴史は浅く、腹腔鏡に慣れている医師は多い。坂本医師は「多くの患者を救うためには、少数の医師が高度な技術を持つことより、安全性の高い安定した技術がより多くの医師に広まること大切」と考え、トップランナーとして県内外の後進の育成を強く意識している。

手術効率化 1日4件可能に

国内で最上級の実績築く



が中心となって細かくチェックし、時間短縮につなげた。ロボットによる手術は1日2件が一般的とされる中、同院は国内で唯一、4件行える体制となっている。

評判を聞きつけて他院の医師から見学の申し込みが後を絶たない。首都圏を中心に九州地方から訪ねてきたケースもあり、高く評価されている。
坂本医師によると、ロボットは開腹や腹腔鏡よりも視野が広く、鉗子が人間の手のように曲がるため細かい作業ができるメリットがある。同院の患者アンケートでは、腹腔鏡に比べて術後の傷口の痛みが軽減していることも分かった。